

うるさいなんて言わないよ

奄美市立赤木名小学校

六年 泊 愛永

「ああー、さとし君はいいなあ。」
ふうつとぼくは、ため息をついた。

さとし君の家は、お父さんもお母さんも働いていて、帰ると自由時間がいっぱいなんだって。DSだってやりたい放題だし、どんなに部屋の中で暴れたって、だれにもしかられないし、宿題もたっぷり遊んだ後でやればいいんだって。

ぼくは、さとし君とは大ちがい。ぼくが玄関を開けると、お母さんのいつもの声が待っていましたとばかり飛んでくる。

「お帰りなさい。学校どうだった。友達と仲良く遊べた。うがいして、手を洗ってよ。」

ぼくは毎日同じセリフをくり返すお母さんの声にうんざりしていたので、ロボットみたいにお母さんの言うとおりに、うがいをして手を洗う。

「はい、おやつ。今日はクレープよ。」

お母さんはおかし作りの天才と言ってもいいほど上手である。毎日手作りのおやつが食べられることは幸

せなのかもしれない。

しかし、ぼくは、おやつを食べながら、なんとか宿題をしないで、外で遊ぶことはできないかという方法を考えているので、味なんかどうでもいい。

お母さんが

「どう、今日のクレープおいしい。島バナナを入れてみたの。ちよつぱり高かったけれどふんばつしちやった。学校はどうだった。今日の宿題はなあに。晩ご飯は何食べたい。洗たく物はすぐ出してね。」
まるで機関じゅうのようにしゃべり出すのだ。

「おいしい。おいしい。宿題はない、ない。」

ぼくは軽く返事をして、食べ終わるとスキを見て玄関に走って行くけれど、お母さんは両手を広げて通せんぼをする。右手に算数ドリル、左手には赤ペンを持って、にやにやしながら立ちふさがる。

「ほら、今日の宿題あるわよ。たっぷりお母さんと勉強しましょうね。」

なんて言う。

（いいなあ。さとし君になりたいなあ。）

しかし、そんなぼくにも一日だけやりたい放題できる日がある。

六月になると、ぼくたちの村ではすももの収穫シーズンになり、となり近所総出で、すもも畑のお手伝い

をする。そのためお母さんもとなりの片岡さんのすもも農園のお手伝いにたのまれて行くことになっていく。

いつも家の中で家事をしているお母さんも外で働ける喜びがあるようで、朝から鼻歌が聞こえてくる。実はぼくも心の中で鼻歌を歌っている。

「お母さんは、片岡さんの農園に行くから、今日の帰る時刻は夕方の六時になると思う。悪いけど一日だけ、お留守番お願いね。」

「分かった。」
ぼくは思わず飛び上がりたい気持ちをおさえて返事をした。

年に一回のカギっ子生活の始まりだ。

今日は大きらいな算数の授業が二時間もあつたけれど、平気だった。ぼくは学校から帰るとき走りながら思うんだ。「ただいま。」と言うと風がやさしくふきぬけていく。あのうるさいお母さんの声は、いっさいしない。カバンをソファにほうり投げて、食べたいだけおやつを食べよう。その後やりたいだけゲームをしよう。考えただけでわくわくする。一人のきままな時間を過ごす楽しみで頭が幸せになった。

幸いお父さんも単身赴任で今大阪にいる。本当の一人である。DSを三時間もやった。でも、そのうちぼ

くは、つまらなくなつて、ごろんとソファにねころんだ。

(あれ?)

ぼくは思わず目をみはった。台所からいい香りがいっぱい近づいてきた。いい香りは、大きなホットケーキになった。

「はい、ホットケーキよ。」

後ろの方で声がしたかと思うとお母さんがにっこり笑つて立っている。

「お母さん、いつ帰つてきたの？」

と話しかけたとたんホットケーキがふわふわあつと消えかけて、お母さんも小さくなっていく。

「待つて、お母さん。」

思わずさけんだけれど、ホットケーキもお母さんも消えてしまった。そして辺りはいつものダイニングルームにもどつた。すると、突然、

「リーン。リーン。」

電話が鳴つた。

ぼくは急いでソファからおりると、受話器に飛びついた。

「もしもし、しよう？」

少しつかれたお母さんの声だ。

「おそいよ。お母さん、もう六時過ぎたよ。何時に帰

ってくるの。」

ぼくはふくれて言った。

「ごめん。しよう。片岡のおばちゃんも脚立から落ちて頭を打って検査中なの。少し帰りが遅くなるけど、我まんしてね。」

お母さんは、それだけ言って電話を切ってしまった。
(ひとりぼっちなんて、もういやだ。)

ぼくは悲しくなつてなみだがこぼれてきた。つまらなくなつて、テレビをつけた。七時のニュースの時間になつてもお母さんは帰つてこなかった。お腹がすいたぼくは、すい飯器からごはんをお茶わんによそつて、塩をかけて食べた。その時、お母さんが帰ってきた。

「まあ、しよう。」

お母さんは頭をなでて、だまつてぼくをだきしめてくれた。

「お母さん。」

ぼくはうれしくて、お母さんの顔を見た。するとお母さんもぼくの顔をのぞきこんで、

「しよう、今日はお留守番ご苦労さま。一緒に夜ご飯食べようね。」

ぼくはニッコリ笑つてうなずいた。

これまで、さとし君のことをうらやましく思つてい

たけれど、ぼくだって本当は、やさしいお母さんが大好きなんだ。

一人になつて初めてそれがわかった。

心もお腹も幸せいっぱいだった。

次の日からもお母さんとのバトルはいつものように続いているけれど、心によゆうができて、なんだかとっても楽しい。

「お母さん。今日も元気に行ってきます。」

